
If ~ 古代ベルカの少年 ~

森沢みなぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

If ～古代ベルカの少年～

【Nコード】

N6070V

【作者名】

森沢みなぎ

【あらすじ】

古代ベルカ諸王時代の騎士、セアラ・ラングフォードは騎士の業と守りたい者を残して眠りについた。そして目覚めた時、そこはセアラが知る世界ではなく未来の世界。戸惑うセアラを支えたのはおかしな喋り方をする少女だった。絶望と無念を抱く少年と希望と信念を持つ少女の物語。

氷の中で少年は眠る（前書き）

新作です。

Ifという言葉が好きで、また使ってしまった。

少し未練がましいかもしれませんがね。

氷の中で少年は眠る

洞窟。太陽の光もあまり届かず、薄暗い中で一人の少年はボロボロの体を支えることが出来ず跪いた。そして目の前の少女を見つめる。

武術の甲冑を身に纏い、長い金色の髪を長いリボンでお団子にするように結んでいる。その両目の瞳は緑と赤のオッドアイ。誰しもが認める美しさがそこにはあった。

しかし、今、その少女の顔は悲しみの色に満ちている。

自分が戦っている少年を見つめ、今にも泣きそうな顔をしている。「やめてください、陛下。今がどのような状況かわかっておいでなのですか……！」

少年は喉が潰れるんじゃないかという勢いで叫ぶ。

「……………」
しかし、少女は答えない。

「戦の時は刻一刻と迫ってきています。今すべきはこのようなことではないはずです……！」

そして少女は、少年の言葉を聞いたたびにその顔は悲しみに歪む。それが少年には許せなかった。まるで、自分が少女を悲しませているかのようで、そして何も出来ない自分が一番許せなかった。

「陛下……どうか、何か言ってください……私は陛下を悲しませるようなことをしたのですか………」

少年は無理やり絞り出したかのような声を出す。

「……………」サラ
少女の口から少年の名が呼ばれる。

その声も少年と同じような声。辛い気持ちを抑えつけて、少女は話し始める。そのオッドアイから薄らと涙を浮かべながら。

「ごめんなさい、サラ。でも、こうするしかないのです。貴方も知っての通り、ここからの世は激しい戦いになります。たぶん、私も

貴方もそれに身を投じれば、無事に帰って来れないのは確実にでしょう」

「いえ、陛下には私がいます。陛下を守る盾がここにいます。たとえば、この身が滅びようとも陛下を守ってみせます!!」

少女はゆつくりと首を横に振る。

「それはなりません。貴方はここで死んでいい命ではないのです。貴方の盾はもつと多くの人を救えます。貴方が生き残ることで救える命があるのです」

拒絶の言葉に少年の顔が陰しくなる。

怒りだ。少年は生まれて初めて少女に怒っている。

「ふざけないください。私は陛下の騎士です。私の盾は陛下を守るためだけにあります!! そして何より私は陛下を守りたい!!」
少年の言葉に少女は満面の笑みを浮かべる。そこに一切の穢れなどなく、逆にその穢れのなさが、少女が本気だということを示していた。

「ありがとう、サラ。貴方にはいつもも助けてもらってばかりでした。正直に言えば、さっき言ったことはこじ付けです。私は、ただ貴方に生きてほしいのです」

「私は陛下の盾として生きたい。それが私の願いだから」

少年は最後の力を振り絞って立ち上がり、歩き出す。一步一步ゆつくりと自分の主である少女のもとへ。

その姿を見た少女はついに溢れだす感情を抑えることが出来ずに、ポロポロと涙を流す。

「それではダメなのです、サラ……」

再び少年の名を呼ぶ。

少女は、覚悟を決めたかのように右手を握りしめ、その拳を少年の腹部へと叩きこむ。

「があはっ　!!」

なんの抵抗もなく決まった拳は、少年を吹き飛ばし、岩の壁へと叩きつける。

少女は、少年のもとへと近づき、右手の掌を少年に見せるようにして翳す。

「へい…か…だめ…です」

意識朦朧とした声。もう喋ることさえまならない。

「今までありがとう、セラ。私は貴方と一緒に過ごせて楽しかったわ」

少女の掌から光が輝き出す。そしてやがてその光は少年を包み込むように大きくなる。

少年の目から少女の顔が薄れて映る。

ダメだ！！ 私は何も成せていない！！ 自分の決意を、陛下を守る事が出来ない！！

少年は最後の力を振り絞り叫ぶ。

「オリヴィエさまあああ！！」

少年の声が洞窟の中に響き渡った。

大きく口を開いた洞窟の入り口。そこには管理局の制服を着た局員達が休む暇もなく、動きまわっていた。機材を抱え、せつせと洞窟内へと運んで行く。

そんな場所に一台のワゴン車が、土煙りを上げながら止まる。扉が開き、中から二人の女が出てくる。一人は凜とした顔つきに、髪を後で一つに纏めた女性。その美しさは大人の女性といった感じだ。もう一人はどこかまだ幼さが残る少女。茶色のショートカットの髪が風で揺れないように左手で抑え、周りを見渡す。先程の女性とはまた違った美しさがある。

そして洞窟の入り口を見つめる。

「シグナム、あそこが例の」

「はい、先日発見された古代ベルカの遺跡です」

「こんな所に遺跡があるなんてどうして今まで気づかなかったんやろ？ 結構首都からも近いのに」

「それはここにまったくと言って言いほど魔力反応がなかったからですよ」

はやての問いに答えたのはシグナムではなく、横から近づいてきた男だった。

「おっと失礼しました。私はここの調査を任されています。考古学者のワーツマン・メイと言います。八神はやてさんにシグナムさんですよね」

「はい、今日は微力ながらお手伝いさせていただきます。と言っても手伝うのはほとんどシグナムなんですけどね」

と言ってはやてはシグナムを見る。

今回の遺跡調査に本当ならばやてとシグナムはまったく無関係だった。しかし、シグナムが古代ベルカ時代を生きていたという経験があると誰かが聞いて、この遺跡調査の依頼が舞い込んできたのだ。そしてはやてはその付添のようなもので来たにすぎない。

「いえいえ、八神さんほどの魔導師がいてくれてこちらとしても安心してるんです。遺跡調査には意外と危険がつきもので、畏や傀儡兵なんかがいったりしますんで」

「そうですか？ それなら、頑張らせてもらいます」

「よろしく願います。じゃあ、早速、中へ」

ワーツマンの案内で二人は洞窟の中へと入って行く。

中は湿気も気温も高いとあって蒸し暑い。一分も歩いていないというのにはやての額からは汗が流れてくる。

「それである、さっきの魔力反応がなかったから発見が遅れたという件なんですけど」

「ああ、それですか。今の遺跡発見の殆どが遺跡に施されている魔法を探知することで見つけています。古代ベルカの時代、特に諸王時代は魔法の発展が目まぐるしかった時代です。そんな時代の遺跡にはよく魔法の細工が施されていたりするんですが、この遺跡にはそれがまったく施されていません。だから、発見が遅れたんです。それどころか洞窟の入口を隠し方も同じ種類の岩をはめ込むといっ

た至って原始的なものでした」

「なるほど」とはやては呟く。

「こんなにシンプルな遺跡は初めてですよ。遺跡は普通、見つからないようにするんですが、これはまるで早く見つけてくれと言っているようです」

そう言ってワーツマンは難しい顔をするが、すぐに「と言っても結局それが仇になって発見が遅れてしまったんですけどね」と笑う。「さて、雑談はこのくらいにして本題に入りましょう。シグナムさんには見てもらいたい物があるんです」

「見てもらいたい物ですか？」

「はい。いや、物というのは失礼ですね。見てもらいたい者と言っ
てほうがいいですね」

ワーツマンの言葉の意味が分からず、二人は顔を見合せて首を傾げる。

「最深部に行ってもらえばわかります」

ワーツマンはそう言っただけで笑う。

洞窟内を奥に奥へと進んで十分程の時間が経った。

はやては「こんなに長い洞窟は初めてや」と苦笑いし、シグナムは何が楽しいのか、周りの岩壁を興味津々に見ている。

「もうそろそろですよ。ほら、あそこ、光が見えるでしょう」

ワーツマンが指差した先には確かに光が見える。そこだけ、天井に穴が空いているのだらう。差し込んだ光は地面を照らしている。

「これが見てもらいたい者です」

その光を照らした地面には氷の塊がある。

その中には少年がいた。岩壁に背中を預けて座り、甲冑姿で両足を伸ばして両腕を力無く垂れ下げている。

二人は絶句した。

この少年はなぜこんな状態で凍結しているんだと

「メイさん、この人は」

「はい、この子は古代ベルカ時代を生きていた少年だと着ている甲

胃で判明しました。まだ、ちゃんとした詳細な時代はわかっていませんが。そしてこの子はまだちゃんと生きています」

「生きてる!!! こんな状態でか!?!」

シグナムが珍しく驚く。しかし、無理もない。はやて自身も声を出して驚きそうになった。

「はい、コールドスリープをご存じですか?」

「は、はい、言葉だけなら」

「あれと同じで体を凍らせて、身体の老化を防いでいるのです」

「こんなことが可能なのか」

「いえ、専門家に聞くとところによると数か月くらいならまだしも、年単位でのコールドスリープは皮膚が壊死すると聞いています。なぜ、生きているのかは原因不明です」

古代ベルカ時代の魔法だろう。その古代の魔法が今の時代になって解明されない。それはその時代がそれだけ魔法に関することや秘密にしていたかを表している。

魔法は国力、戦力だ。敵国に知れ渡らないように独自の魔法は文献や書物にまで記載されたいのだ。

はやてはゆっくりと近づく。

「この人、綺麗な顔やな」

その整った顔立ちと神々しさを感ぜさせる銀髪、その全体の姿からは妖美ささえ感じられる。

ゆっくり伸ばした手の少し指先が氷に触れる。

すると、氷はそこからひび割れが起こる。

「え?」

そして氷中にひびが回ると、そのまま粉々に砕け散った。

「.....」

「.....」

後の二人はその一部始終を見て啞然としている。

「え、えっと、す、すいません!!! まさか、少し触ってくらいで砕けるものとは思わなくて!?!」

はやては何度も頭を下げる。

しかし、ワーツマンはそんなはやてを余所に、はやてを通り過ぎて寝ている少年に近づく。

「……あ、ありえない」

「へえ？」

「ありえないですよ、八神さん。先程、氷は、どんな機材でも割れなかった。魔導師五人がかりでも割れなかったんです。ただ、触れただけで割れるなんてありません」

「じゃあ、なぜ主はやてが触っただけで」

「謎だ。いったい古代ベルカの魔法技術はどうなっていたんだあ！
！」

はやてとシグナムを置いて、ワーツマンは自分の世界へと入り込み始めた。

そんなワーツマンに苦笑しながらもはやては、少年を見つめる。

銀髪に純白の肌、身に纏う甲冑にはいたる所に傷が見られる。

古代ベルカの騎士。

彼がそれである可能性は高い。いや、そうだと断言しても良いだろう。その甲冑がそれを物語っている。

だが、問題はどうして彼が凍結されていたのか。それも生きたまま。

彼に敵対する者という可能性は低い。敵ならば生きたままではなく、殺す。それに殺した後には、凍結する理由もない。

なら、彼の仲間が。しかし、なぜ。

はやての頭の中で推測が、飛び交う。だが、どれも確信をもって言えるようなものではなかった。

教会の少女は先を見通す

その後、少年は聖王教会の医療施設へと運ばれた。遺跡から一番近い管理局の医療施設だったこともそうだが、一番の理由はやはり少年が古代ベルカ時代の人間ということ。聖王教会は、古代ベルカに関する文献や資料などが揃っている。ならば、少年もそこへ連れて行くべきではないのか、と必然的に判断されたのだ。

そして少年は今、身体検査を受けている。長期間のコールドスリーブがどんな身体にどんな影響を与えるのか。何百年、何十年もの間もコールドスリーブが出来ないとされているこの時代には、まったく想像が出来ない。もしかしたら、今後命に関わるような症状が出るかも知れない。そのための身体検査だ。

そしてその検査中、シャツハ・ヌエラとカリム・グラシアは、その検査の様子を窓越しに見つめていた。

「時を超えてきた古代ベルカの騎士ですか……。管理局は大騒ぎでしょうね」

とシャツハが呟く。その顔はまだ自分が見ている者が信じられないといった様子だ。

「そうね。これまで仮説とされてきた歴史、諸国の王たちの謎、もしかしたら聖王戦争の全貌も知れるかもしれないわ」

シャツハは息を飲む。そうなればこの世界の歴史が大きく狂うかも知れない。それはこの聖王教会にも大きな変化を生むだろう。

「でも、私はそんなことよりもあの人が心配なの」

「ええ、ですが身体検査も異常はなさそうですし」

「検査のことじゃないわ」

「それなら何を心配なさっているのですか？」

「あの人のこれから、あの人が目覚めてから」

少年は過去の人間。古代ベルカの時代に死んでいたはずの命だ。

しかし、彼はこの未来で生きている。家族も、友人も、知人もいな

い未来で。そんな人の気持ちをいつたい誰が理解できるのだろうか。気づいたら未来で、周りにいるのは顔も知らない他人ばかり、知らない組織に保護され、根掘り葉掘り自分が生きていた時代についてきかれる。

それがどんな気持ちなのか、それを理解できる人はない。

シャツハは、自分を改める。自分が彼に支えになつてあげられるように。

「そうですね。私も微力ながらお手伝いします」

シャツハがそう言うときカリムはにっこりと微笑んで「ありがとう」と呟く。

「それにしても若いわね、彼。まだ、私と同じ年と言ったところかしら？」

まじまじと少年の顔を見つめるカリム。

仕事柄、教会に籠りっぱなしで同い歳の異性とあまり面識がない彼女。故に興味湧いたのだろう。それに彼女も異性に興味を持つ年頃だ。普通なら恋人の一人くらいいるだろう。

そこでシャツハはハツとした。もしかしたら、彼女は少年に一目惚れでもしたんじゃないだろうか。

確かに少年は良い顔立ちをしている。教会のシスターたちもそのことで騒いでいた。カリムももしかしたら彼のことを

「騎士カリム。彼のこと、その……気になるのですか？」

「ええ、これから彼をどうしていか話し合わないと」

「いえ、そういうことではなく、い、異性として……」

その言葉を聞いて質問の意図をようやく察したのか、カリムは顔を真っ赤にする。

「べ、別にそういう目で彼のことを見てるわけでは……。ただ、彼のような歳でも戦争に出向いていたんだなと……」

「そうでしたか、変なことを聞いて、すみません」

「どうしてそう思ったの？」

「ジツと彼のことを見ていたので……すみません」

「別に咎めてるわけじゃないの。ただ、歳の近い男の子と接した機会があんまりないから、どこか可笑しいのかなと思って」

そう言って、ちらっと少年の方へと視線を向ける。

「どうやら、シャツハの一言で逆に意識させてしまったらしい。カリムは少年の方を見ようとするが目を泳がせている。こついう恋愛沙汰に耐性がまったくくないのだ。」

「確か彼がいた時代は諸王時代でしたね」

「え？ なんの話かしら」

「騎士カリムが言っただけで、彼の歳でも戦争に出ていたという話です」

自分との葛藤から抜け出せないように見えたシャツハは話を無理やり変える。本を正せば余計なことを言った自分が悪いのだから。

「諸王時代はベルカの戦乱期の中でも特に争いの多い時代でしたから、彼のような年ごろの男子の多くは戦場へと赴いていたのでしよう」

「今の時代では考えられないことだわ。このぐらいの歳の子は学校に通ってるのが当たり前なのに」

「そう言うものその普通ではない例がシャツハの目の前にいるのだ。カリムも普通なら学校に通っている年ごろだ。そんな自分を差し置いて『普通なら』という言葉を使うカリムは実年齢より精神年齢が高い。」

（騎士カリムも少し普通の女の子としての生活を送られた方がいい……。このごろは仕事ばかりで碌に自由な時間もない）

「そう思うとカリムの周りには似たような子が多い。」

八神はやてが素晴らしい例だ。彼女もまた仕事熱心な人だ。それ故に自分の生活を蔑ろにしてしまう。しかし、彼女の場合は頼れる家族が傍にいてくれている。体を壊すことはないだろう。

カリムの場合は。

（ロツサは管理局勤めで傍にはいない）

シャツハはカリムの弟を思い出すが首を振る。

やはりここは自分がすっかりせねば、と身を引き締める。

翌日。はやては聖王教会に訪れた。昨日の少年が気になって、と
いうのもあるがカリムに呼ばれたというのが理由だ。

シャツハに少年の病室に案内され顔を見た後、カリムの執務室へ
と足を運んだ。

「いらっしやい、はやて。急に呼び出したりしてごめんなさい」

「ええよ、私も近いうちに来ようと思ってたから」

はやてが席につくとシャツハがスツと紅茶の入ったティーカップ
をはやての前に置いた。「それでさっそくやけど話って？」

「あの人の素性と今後について」

カリムは一枚の紙をはやてに差し出す。

「そこには彼が生きただろうと思われる時代が詳細に書かれている
わ。と言っても騎士甲冑だけで判断したから、まだ予測の域を出て
いないけど」

はやては内容を流し読みしていく。

「この時代は聖王オリヴィエ様がご健在だった頃やね。しかもこの
騎士甲冑、当時聖王家の騎士に与えられたもんなんや」

「聖王家に剣と杖を捧げた者だけに与えられる甲冑だと聞いているわ」

「凄い人やつたんや……」

あんな状態になるくらいだから只者ではないと思っていたが予想
以上だった。

「それで今後だけど、私は彼が目覚めて体が回復するまでは聖王教
会の方で預かろうと思うの」

「ここで？」

「正確には私の下でと言った方がいいかしら。彼はこれから各方面
で注目の的になるわ。この聖王教会もその方面の一つ。だから、私
は彼が落ち着いて自分の身の振り方を決めれる時まで抑制力となり
たいの。起きたばかりで右も左もしらない彼がいきなり質問攻めに

されるのはかわいそうでしょ」

「うん、私もカリムに賛成」

流石だとはやては思う。その歳で聖王教会の上に立つだけあってカリムもいつも先の先まで考えている。

はやても見習うべきところだ。

「それではやてにちよつとしたお願いがあるのだけど」

はやてはティーカップを持つ手を止める。

「彼が目覚めたら週に一度程度でいいから、会いに来てほしいの」

「それはどうやるな。私はオツケーしたいけど、仕事の方がどうなるか」

定期的な仕事の方がなんとかなるとしても、急な事件や事故などが起こったらそれにつきつきりになってしまう。はやては今、そういう部署に配属しているのだ。

「仕事の方は心配しないで。はやてさえ了解してくればこれは聖王教会からの依頼となるから、これも仕事の一環になるわ。緊急時の配慮の方もこちらでやるから安心して」

そこまで根回ししていたか。

はやては苦笑する。

「それなら、断る理由はあらへんな。でも一つだけ訊いていい？」

「ええ、どうぞ」

「私の頼まんでも聖王教会にはシスターや執事たちがいる。なんで私を選んだのか訊かせてくれへん？」

カリムは紅茶を一口飲み、ティーカップをそつと置く。

「これは私の推測なんだけど。はやてが触って氷が砕けたのは偶然じゃなく、何かしらの理由があると思っっているの」

「確かに偶然って言うにはおかしい気もするなあ」

「だから私が勝手な解釈を付けてみたわ」

と笑顔で言う。

ホントこの人はいろいろと凄い。

「私はあの氷に魔法が掛けられてたと思うわ。特定の人に触らないと絶対に砕けない呪いのような魔法を」

その特定の人って言うのがはやてだったというわけだ。

「問題は特定の人条件だけど、そうね……はやてだから、『可愛い女の子』ってところかしら」

なんてことを真顔で言うのではやては思わず飲んだ紅茶を吹き出しそうになってしまった。

「な、なんに言うんや」

「あら、はやては可愛いわよ。私の自慢の妹だわ」

カリムは両手を合わせて楽しそうだ。

本当にこの姉には敵いそうにない。

「まあ今のは軽い冗談。あ、はやてが可愛いのは本当よ」

「そこはええから」

なかなか話が進まない、はやてがそう文句を言うと「本当なのに」と不満そうな顔をする。だが、紅茶を一口飲んでリセットしたように顔が穏やかになった。

「私が言いたいのは、氷が砕けたのははやてが触ったから。つまり、彼にははやてが必要なんじゃないかと思っているの。だから私は出来るだけ彼の傍にはやてがいてほしいの」

確かに道理は通っている。

けど

「私がいてどうなるんやろ」

そんな不安が残る。

「それは誰にもわからないわ。でも、もしかしたら世界が救われるかもしれないわ」

それは流石にスケールがでか過ぎませんか、とはやてがツッコミを入れようとした時、緊急を知らせるアラームが執務室に鳴り響いた。

意識が覚醒する。その瞬間、魔力が体中を駆け巡り、解き放たれた。

辺りから悲鳴や物が倒れる音、ガラスが割れる音が聞こえる。目の前に広がるのは真っ白な部屋、見たこともない置物、異様な服を着た者たち。その人たちは自分のことを驚愕の目で見つめている。

だが、そんなことはどうでもいい。問題はここが何処かということだ。自分は急いで陛下のもとに戻る。早くしなければ戦が始ってしまう。

サラは体に力を入れて立ち上がろうとする。

「うあっ！！」

しかし、力が上手く入らず、地面に体を叩きつけることになる。

そこでようやくサラは自分の異変に気付く。両腕は骨と皮だけで筋肉はまるでない。息をするのも辛く、異様に体が冷たい。

自分が寝ている間になにがあったのか。分からないが、今はそれよりも優先すべきことがある。

サラは再び両腕に力を入れた。鉛を体中に纏ったような体をなんとか持ち上げ、胡坐をかく体勢までもってきた。しかし、そこで息は切れ、腕も小刻みに震え、力がまったく入らなくなった。

サラは右手に魔力を集める。

魔力はある。

サラが座っている床に魔方陣が展開される。そして体が光に包まれたかと思うと、サラはゆっくり立ち上がった。

身体強化の魔法で無理やりに体力を作り立ち上がったのだ。だが、それでも立つのがやっとだ。足は震え、壁に手ついていないと長くは立ってられない状態だ。

「ダメです。そんな無茶をしたら」

何処からかそんな声が聞こえたが、サラは構わず歩き出す。壁を伝い、一步の歩幅はまるで歩き始めた幼児のようだ。

それでもサラは息を切らしながら、歩き続ける。

「……オリヴィエ様」

「そこまでです」

不意に肩を掴まれた。

振り向けば修道服を着た修道女らしき少女がこちらを睨んでいる。そしてその後ろにはもう二人の少女が心配そうにこちらを見つめている。

「今の貴方は長い眠りで筋力も衰え、栄養失調状態です。貴方に何の事情があるかわかりませんが大人しく寝て」

「……離せ」

修道女の言葉を遮るようにサラは呟いた。

「ダメです。貴方は絶対安静の」

「離せ!!!」

怒声と共に突風が吹く。肩を掴んでいた修道女は軽く体を吹き飛ばされ、床に尻もちをついた。周りの人たちも何が起きたのか分からず啞然とする。

そんな周りに目もくれずサラは歩き出した。

「待つて」

今度は別の声サラを呼び止める。修道女とはまた違う形の修道服を着た少女。

「貴方に事情があることはわかります。でも、今の貴方が行つてどうにかなるの？ そんな体では何もできませんよ」

サラの動きが止まる。そして顔を少しだけ少女に向ける。

「……そ、それでも行く……それが俺の役目」

そうそのためにだけにサラは存在する。例え、今の自分が役に立たなくとも、陛下を守る盾くらいにはなる。

サラは再び歩き出す。しかし、一歩目の足を出したとき、大きく咳き込み始める。

咳き込むたびにあばら骨が軋み、激痛が走る。

「うがあああ」

その痛みに耐えきれず、サラは壁に背を預けそのままずると

床に倒れこむ。

胸を肉が抉れるんじゃないかと思うくらい握りしめ、その痛みに耐える。しかし、体力の限界と痛みからやがて意識は遠のき、やがて視界は完全に真っ暗になった。

認めたくない真実

少女は戦場に立つ。その周りに無数の死体に囲まれて立っている。こちらに背を向けていて顔は見えない。だが、その背中からは哀愁が漂っている。

もともと争いごとを好まないお方だ。それが今や戦場の最前線に立って最も多くの敵を倒している。自分の心と想いを殺し、敵も殺す。そんな日々が続いている。

このままだと身体より先に心が壊れてしまう。

「……」

少女は無言のまま振り向いた。その顔に表情はない。

戦場での彼女の顔だ。心を殺して、感情を生み出すことをしない。今の彼女はからくり人形のようにただ決められたことを行うだけ。

「行きましょう」

すれ違いざまに呟く。

今はただ従うしかない。戦いを無くすことも、彼女の苦しみを和らげることも、言葉をかけることでさえ、今の自分にはできない。

「なんて無力な……」

自嘲するように呟く声は誰にも聞こえない。

五歩先を歩く少女の背中は未だ哀愁が漂う。

だからせめて戦おう。彼女を守るため、彼女が戦わなくていい世界が生まれるまで、自分はそのために生きているのだから。

体に力が入る。

この力はたった一人のためだけに存在する。

夜。

病室は月の光によって異様な室内を照らす。規則的な機械音を鳴らす機械、頑丈そうな壁、鉄で出来た身の丈ほどある棒、その棒と

サラの腕を繋ぐ管。

サラはぼやけた意識をはっきりさせようと自分の頬を軽く叩く。見るものすべてが目新しい。いや、異質だ。ここにあるもの全てが自分のいた世界のものではないことがわかる。

もっとも新しい記憶は洞窟で魔法を掛けられた時。その後、自分はどうなった。移転魔法を掛けられたのか。

思考を巡らせるが、答えを見つけるには情報が少なすぎる。

サラの体を光が包んだかと思うと、体をゆっくり起こした。やはり体力は殆ど残っておらず、全身の筋肉は衰えている。体全身が痩せこけて、まるで貧困に苦しんでいる者のようだ。

あの魔法の副作用だろうか。それ以外原因が思い当たらない。

それよりも現在地を確認しようと、サラは鉄棒に結ばれた管を剥がした。そして地面の感触を確かめるように足をつき、慎重に立ちあがった。

先程よりも上手く身体強化の魔法がかかっている。これなら普通に歩く分には問題ないと扉に近づいたときだった。ちょうど扉が開き、外から一人の少女が入ってきた。

「なっ　！！」

少女はこちらを見てあからさまに驚いている。

「なにしてるんや。今の君は普通に歩ける状態じゃないんやで！！」
怒声と共にサラの腕を掴んだ。

サラはそれを振り解こうとするも、今の彼の力では少女の握力にも勝てない。

「離してください！！　私はこんなところで寝ているわけにはいかないんです！！」

「ダメや、大人しく寝なさい！！」

少女はもう一方の腕も掴み、サラをベッドへと押し戻していき、そしてそのままベッドに押し倒す。

必死の抵抗も虚しく少女の手を振り払うことができない。今のサラの力は少女にも劣る。

零落れたものだ、と自嘲した笑みを浮かべる。

そして再確認した。今の自分は何の役にも立たない、出来そこないの騎士なのだ。

「……どうして泣いてるんや」と少女は呟く。

そこでサラは自分の目尻から流れてる水滴に気付く。

泣いている。そうサラは悲しくて泣いているのだ。

弱い騎士に存在意義はない。

主を守れない騎士など必要ないのだ。

「騎士はやて、大きな声が聞こえましたがどうし」

不意に扉が開き、サラを止めた修道女が入ってきた。そして入るなり二人の体勢を見て絶句している。

そう少女がサラの両手を押さえて馬乗りになるという体勢を見て

「き、騎士はやて。ここは教会なのでそういった行動は慎んでもらいたいのですが……」

声が語尾に進むのに比例して、音量も小さくなっていく。

そして最初は「へ？」と首を傾げた少女も、改めて今の自分の格好を見て、顔を真っ赤にした。

「い、いやこれは違うんや。そ、その彼がベッドに寝ようとしなかったから」

「だから無理やり？」

「そうやけど、シャツハ勘違いしてるで、顔を赤らめんといて！」

時間は移り、病室にははやて、シャツハ、カリム、そして少年がいた。

はやての必死の説明により、シャツハの誤解は解かれた。そして少年は逃げ出さないように手足をバンドで拘束されていた。

「ごめんなさい。でもこうしないと落ち着いて話もできないから」
そう切り出したのはカリム。

「なら話してください。ここは何処ですか、私はどのくらい寝てたんですか」

少年の目がカリムを見つめる。その瞳からは必死さがヒシヒシと感じられる。

「順を追って話します。まずここは聖王教会の医療施設で、洞窟の中で凍結した貴方を見つけて、ここまで運んだんです」

「いりようしせつ……」

少年は聞き慣れない言葉を復唱し、辺りを見回す。

「検査の結果、貴方は至って健康です。長時間の凍結による後遺症もありません」

「長時間？ どれくらいですか。どれくらい私は眠っていたんですか」

少年はその言葉に反応した。

カリムは顔を歪ませる。

これから彼に告げなければならぬことは彼にとって辛いものとなる。それを受け入れなければ、いや乗り越えなければならぬ。

「落ち着いて聞いてください。ここは、この時代は貴方が生きていた時代よりも遙か未来の世界。ここは貴方が生きていた時代ではないのです」

沈黙が生まれる。

少年はカリムの顔を見つめ、カリムも少年の顔を見つめる。

そのカリムの目はとても冗談やジョークを言っている顔ではない。だからこそ、少年は真実だと確信し、現実から逃避させた。

「……何を言ってるんですか……お伽噺ではないんですから、そんなことがあるわけがないでしょう……」

「いいえ、事実です。今は新暦0070年。私たちは貴方が生きた時代を諸王時代と」

「止めてください」

カリムの言葉を遮るように、事実を受け入れないために呟く。

「いえ、聞いてもらいます。これはこれからの貴方にも関わること

なんです。

貴方がいた時代は古代ベルカ、諸王時代と呼ばれています。今の時代からはるか昔、それこそお伽噺のように語り継がれている時代です」

「……何処にそんな証拠がある」

「ここにいくつかの文献を用意しました」

カリムの声と共にシャツハが二冊の本をテーブルの上に置く。

「これは貴方が生きた時代の記録が載っています。僅かですが貴方の記憶とも当てはまるものがあると思います。それに貴方が眠った後の記録も……」

「……………」

少年は何も言わずに俯いた。

これでカリムが嘘をついていると言う選はほぼなくなった。証拠として出された歴史書が偽物などという、直ぐにばれるような見え透いた嘘はつくはずがない。

カリムが言っていることは真実であることがほぼ証明された。

しかし、そんな理論的なことを並べ立てても少年には信じたくないことだった。今の少年には冷静という二文字が頭から消えてしまっている。

「そんなはずがない。僕の生きた時代が遙か昔なわけない。僕は眠る前のことを昨日のことのように覚えてる。覚えてるんだ!!!
うっっ!!!」

興奮して激昂したせいか少年は呻き声を上げて体を抑え始めた。

「だ、大丈夫ですか!!! シスターシャツハ、誰か呼んできて」

「はい」

「いらない!!!」

少年の一言でその場にいた全員が固まった。

「こんな痛み、大したことない。大したことないから一人にさせてくれ、お願いします……」

少年は息を荒くしながら言う。

カリムはその様子を見て頷いた。

「わかりました。でも、バンドは残させてもらいます」

と言い残し、カリムとシャツハ、はやては部屋の外へと出て行く。はやては出て行く前にもう一度少年の方へと目を向ける。

体を抑えながら息を整えている少年の顔は今にも泣きそうだった。

一人となった病室でサラは落ち着きを取り戻そうと息を整えていた。それに合わせて痛みも引き、気持ちを落ち着けた。

『ここは貴方が生きていた時代じゃないんです』

彼女の言葉が頭の中で復唱される。

（はは、何言ってるんだ、あの人は……ここが遥か未来の世界？
そんなわけないだろ……）

頭の中で悪態をつきながら、テーブルの上の本を手取る。パラパラと流し見る。しかし、そこに載っている文字はサラが見たこともない文字だった。

これは時代が流れて文化が変わったのか、それとも彼女が偽物とわからないように文字を読めなくしたのかはわからない。ただわかることは、偽物の本と文字を作ってまでサラを騙す理由が彼女にはないということだ。

「本当に……ここは未来なのか……」

サラがポツリと呟いた時、ページは本の挿絵に行きついた。

「っ！ー！」

それは見覚えのある絵。オリヴィエが成人を迎えた時に描かれた絵だ。

オリヴィエはこの絵を描いてもらった時、すぐにサラに見せて来たことを覚えている。満面の笑みを浮かべてその絵を見せてくる彼女は「どうですか、似てます？」と感想を求めてきた。サラが「はい」と短く返すと、不満そうにして「もっと何か気の利いたことを言えないのですか」と怒られた。

その絵が今、この読めもしない本に載っている。王族の人間の絵がこの何処にでもありそうな本に載っているのだ。そんなことは普通はありえない。サラの時代では　だ。

「オリヴィエ様……」

嗚咽が漏れる。

オリヴィエの悲しい顔は今でも鮮明に覚えている。意識が途切れる寸前には涙を流しているようにも見えた。彼女は今生の別れになることを知っていたのだ。それを知り、悲しい思いをしてまでもサラを眠らせた。

なぜ

当然の疑問がサラの頭の中を駆け巡るが、答えを見つけることはできず、朝を迎えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6070v/>

If ~ 古代ベルカの少年 ~

2011年8月31日03時33分発行